

カムチャッカ～北海道東部間の津波エネルギー分布

Distribution of Cumulative Tsunami Energy from Kamchatka to East Hokkaido

羽鳥 徳太郎 [1]

Tokutaro Hatori [1]

[1] なし

[1] None

近年、南千島では1994年の地震(M8.1)など、地震活動が顕著で津波が多発しているが、カムチャッカでは長らく静穏期が続き、1997年12月に地震津波があった。カムチャッカでは、1737年以降の津波がSoloviev他のカタログに整理されている。本稿では、カムチャッカ～北海道東部間を島弧沿いに150km区間に分割し、最近100年間とそれ以前の歴史津波を対象に、各区間における波高の2乗累積値を求めて比較してみた。

近年、南千島では1994年の地震(M8.1)など、地震活動が顕著で津波が多発しているが、カムチャッカでは長らく静穏期が続き、1997年12月に地震津波があった。カムチャッカでは、1737年以降の津波がSoloviev他のカタログに整理されている。本稿では、カムチャッカ～北海道東部間を島弧沿いに150km区間に分割し、最近100年間とそれ以前の歴史津波を対象に、各区間における波高の2乗累積値を求めて比較してみた。

解析の結果、最近100年間の累積値はカムチャッカ南部～パラムシル島間が最大であり、ついでウルップ～色丹島間の値が大きい。南千島における歴史津波の累積値は、近年の津波の1/4～1/3であるが、カムチャッカ南部では逆に歴史津波の累積値が上回っている。今後、日本に被害をもたらす可能性がある、カムチャッカ南部沖は要注意域であろう。